

古文

古文 日々の思い

● 古文の窓

兼好法師、こんな一面も

学習のねらい

これまで、兼好法師の随筆『徒然草』を読んできましたが、兼好は『徒然草』のみならず、多くの和歌を残しています。存命中は、随筆の作者としてよりも、大変優れた歌人として知られていました。兼好の経歴を押さえた上で、兼好が詠んだ和歌を読んでみましょう。



講師
山本章博

● 学習のポイント

- 〈一〉出家者としての兼好法師を知る
- 〈二〉歌人としての兼好法師を知る
- 〈三〉兼好法師の和歌を読む

■ 出家者としての兼好法師を知る

兼好は三十歳前後で出家し法師になったと考えられています。『徒然草』には、仏教の考え方が記された段も多く見られます。

◎ 『徒然草』のもっとも古い写本……正徹が写したもので、室町中期。

◎ 『正徹物語』

- ・ 出家前の名前は、兼好であった。
- ・ 宮廷を警護する武士であった。
- ・ 後宇多上皇の崩御をきっかけに出家した。

■ 歌人としての兼好法師を知る

- ・ 二条為世に和歌を学ぶ。為世は、藤原定家の曾孫にあたる。
- ・ 二条為世門下「和歌四天王」の一人であった。

兼好法師の和歌を読む

- 兼好法師が頓阿へ送った和歌

(頓阿……兼好とともに「和歌四天王」と呼ばれた一人。)

夜も涼し 寝覚めの仮庵 手枕も 真袖も秋に 隔てなき風 (兼好)

〔現代語訳〕

夜も涼しい。仮庵で夜中にふと目が覚めると、自分の腕枕にも、左右の袖にも秋の風は隔てなく吹いているよ。

- 杳冠 よ・ね・た・ま・へ (米たまへ)

せ(せ)に・も・ほ・し (錢も欲し)

- 頓阿が兼好法師へ返した和歌

夜も憂し ねたくわが背子 果ては来ず なほざりにだに しばし訪ひこせ

(頓阿)

〔現代語訳〕

夜も辛い。恋しい私の夫は結局来なかった。いいかげんな気持ちでもいいから、少しでも訪ねてほしい。

- 杳冠 よ・ね・は・な・し (米はなし)

せ(せ)に・す(ず)・こ・し (錢少し)